

# 日本に來た媽祖

## —東アジアの航海神の足跡をたどって—

横須賀大津高校 佐藤 雅信

### 最初に 媽祖の教材化

媽祖は日本史と世界史の両方にかかわる教材である。もちろんそれを取り上げてひとつの主題とするには至らないが、重要事項に派生する発展的学習の中に含める十分な内容・歴史的意義を有し、かつ歴史の「忘却物」ではなく今日的意義があると思われる事項である。

日本史の中で取り上げるなら、「鎖国」をめぐる国際関係、水戸光圀の業績、関東平野の開拓と物流であろう。指導横領曰く「……日本史の展開を、アジアのみならず世界史的視野に立ち、多くの要素を踏まえ、幅広い見方で大きく考察させる。と同時に、歴史の展開の中、日本文化の特色やその伝統の形成について認識を深める。その際、歴史の過程を実証的に考察させることによって歴史の見方・考え方を身に付けさせ、歴史的思考力を育成する。(以下略)」ここに媽祖を学ぶ目的がある。

世界史では、「世界史への扉 世界史のなかの日本」で媽祖を取り上げることが可能である。だがここでは「よく知られている事項」を対象としてそれを見直すというスタンス。だが媽祖は日本ではほとんど知られていない。従って「東アジア海域」というタテの地域史の中で、「大交易時代」以降の華人・琉球・倭寇、明清交代に伴う周辺諸地域への影響、という項目のなかで語られる社会・経済・文化面に属するテーマになるだろう。

今回のようなテーマは、そもそも日本史、世界史というように分けられない境界領域に属す。世界史の中の日本、あるいは日本外交史という項目には収まりきらない。政治史・社会史・経済史・文化史というくくりも越える視野を求められる。どこまでが授業実践の対象になるかは今後の課題になる。

### 0 基本的知識として 華人の宗教「儒・仏・道」

現代日本における宗教理解は、特に中国人のそれとはやや異なるのでここで再確認しておきたい。

儒教とは「官」の倫理規定で、「宗教」ではなく役人として守るべき「生活スタイル」である。典型的官尊民卑思想のあらわれで、ほんらいは庶民は孔子を祀ることはない。

仏教は東晋・南北朝以後一大潮流となる。戦乱による生活の苦しみを癒す「生き方」あるいは「死者への理解」。菩薩（観音・弥勒）や如来は支配者も庶民も共通して持つ救済への期待感であった。

道教は古代からある民間信仰を土台とする新宗教である。ベースは祖先崇拜。漢代後半に五斗米道（張陵集団は魏に帰順し「天師道」）、東晋以後に神仙道が形成される。中心概念は目には見えないが存在すると信じられた「気」である。北朝北魏の寇謙之は仏教の思想体系を導入して新天師道を開き、唐代には帝室の保護を得て仏教の対抗馬となった。

宋代になると上座部的(?)で修行重視の北方全真教と、南方呪術系正一教が展開する。全真教は開祖王重陽の弟子邱处機（長春真人）がチンギス汗と面会し公認されて教団として大発展する。

正一教は現世利益を願う庶民の宗教となり「福祿寿」願望の受け皿となった。さらに歴史上の英雄や庶民のために尽くした人物も人格神（關聖帝君!）としてヒエラルキー化し、庶民の願望担当神（土地神や門神）とした。試験の際には学問神に祈るが孔子には祈らない。

諸神のうち船乗りや漁民の航海安全を担当するのが媽祖である。宋代以降、華人の船が到達した各地の港に廟が建てられた。神号は「天妃」「天后」「天上聖母」。ちなみに「媽」の文字は、日本の漢和辞典では「ボ」もしくは「モ」の音で載っていて「マ」の音で引くことはできない。

道教の神々はよく大乘仏教と習合する。好例が媽祖と観音菩薩の習合で、女性の姿の媽祖観音となって仏教寺院に同居することになる。

## 1 まえふり 異形の水神社

家康の関東入り直後から始まった利根川東遷事業は、1594年から4代家綱時代まで続く。関東平野を整備・農地化するための大水利事業であり、これにより関東平野は水田に変貌した。だが東遷事業は不完全であったため「坂東太郎」は下流域に洪水頻発をもたらす。特に霞ヶ浦と利根川にはさまれた現茨城県稲敷市と千葉県香取市佐原地区あたりは毎年のように堤防が決壊したため復旧工事は明治以降まで続いた。佐原地区は利根川の北部で、稲敷市との境界には霞ヶ浦と利根川をつなぐ横利根川が開削されている。明治になって佐原地区は千葉県へ編入され、のち佐原市となったが、平成の大合併で南側の香取市の一部となっている。

堤防の補修は水戸藩の力だけでは不可能で、下総千葉氏に属する国人「木内氏」のかかわりと、そしてこの地域の水利を司る香取神社に属した山岳系行者の勧進によりなされた。その証拠にこの地域の神社にはたいてい「湯殿山」「大山阿夫利神社」の碑が境内にある。

この神社群は同じ形状をしている。分布地は稲敷東部～佐原全域、すなわち前述した利根川北岸～常陸利根川南岸に集中し、神社の本殿はふつうだが、カバーする屋根と外壁は特異な形状を有する。拝殿を持つものとなないもの、本殿の囲いの形状の若干の相違はあるが「水神社」と呼ばれている。さらに地区名で「〇〇神社」と呼ばれるものや、別系統の（例えば「諏訪神社」「須賀神社」）の名称で呼びならわされてものもある。地方史史料には「古くからあったが、江戸時代の〇〇年間に新たに建てられ、洪水のたびに幾度も立て直された」程度の記録はしかなく、また記載すらないものも多い。

この神社群が集中している場所が佐原地区と稲敷市で、注目すべきは香取市佐原ニ（地区はイロハニと表記）にある荒川水神社である。「荒川」という集落じたいが過去何度も利根川の堤防決壊の歴史を示している地名である。この神社の境内に「天妃宮」がある。なぜここに天妃が祀られているのか？

荒川天妃宮は宝暦年間(1751～64)建立、1971年再建された。水神社自体は享保年間(1716～1736)建立とある。『佐原町史』にはこう記載されている。

『本社は今を距(へだた)る百九十有餘年享保年間の勧請にして幾回かの洪水の害を蒙り、社殿爲に破損すること屢(しばしば)なりしが神地を變移せしことなし、本社祀る所の水分神は古事記に天水分神又は國水分神とありて水の上下縦横を司れる神なりと』



## 2 はじめに アジアの媽祖廟

現在の媽祖の本場は台湾である。媽祖信者は台湾の7割とも言われる。「本尊」的な北港朝天宮、台南大天后宮を筆頭に、廟は全土に「数百」とあるとされる。最も格が高いのが台南大天后宮で、1664年建立の明の王族寧靖王朱術桂の府邸が1684年に改築改称された。その経緯は後述する。1818年の火災によって建物や文物は焼失し、1830年に再建され現在にいたる歴史遺産である。

中国沿岸の福建省の湄州島は媽祖の生誕地。福州は媽祖廟だらけである。いま湄州島にはテーマパ

一クのごとき媽祖ランドが建設され中国・台湾の観光客が押し寄せている。**マカオ**は「媽閣廟」のあった場所で、ポルトガル占拠のときマコウミョウ→マカウとなったのが語源である。

**東南アジア**では華人の進出は媽祖とともにある。明代鄭和の遠征で華人集団が住み始めた**マラッカ**には「**青雲亭**」がある。ここは東南アジア最古の寺院+道観で、本尊は観音菩薩であるが、左に媽祖、右に關帝など道教諸神が鎮座している。マラッカ市内には出身地ごとに華人の「**会館**」があるが、必ず媽祖を祀っている。マレー半島は錫とゴムの労働力として華人移住の長い歴史があり、**ペナン島**はマラッカに次ぐ「**媽祖センター**」といってよい。**シンガポール**でもチャイナタウンの一角に「**天福宮**」があり、その向かい側に「**福建会館**」がある。「**福建会館**」には「**天福宮**」というのが東南アジアの定番名称である。マレー半島の先のミャンマー沿岸部はムスリムとインドと華人の混在した世界で、**バゴー**（歴史用語では**ペゲー**）にもそれらしき観音寺を確認できた。ここには10mを超す観音像と「**大雄寶殿**」（曹洞系と思われる）があり、本尊の観音菩薩の左には媽祖らしき像があった。残念ながらビルマ語のお布施証明しかなく来歴等は不明である。

**沖縄**（琉球）の媽祖廟は台湾より古い。最古の**上天妃宮**は沖縄にやってきた明人の居住地である久米地区に建てられ、現在は「**天妃小学校**」の東南の隅に石造りの門が残っている。最も西にある波の上宮の隣に**至聖廟**があるが、もとは媽祖廟であった。今次の大戦で国際通りの近くにあった孔子廟が焼失し、ここに移ってきたのである。東南アジアではありえない儒道の同居という稀有な例で、居候の孔子を祀る大成殿が幅を利かせている。いまは施設の運営団体は久米崇聖会であり、敷地内の媽祖廟（隣に關帝廟もある）は知られていない。といっても参拝者がいないわけではない。大多数は台湾からの観光客だが、旅の安全を祈る地元の人もいる。2013年、江南風庭園で知られる福州園の南側に孔子廟（大成殿）が新たに作られ、孔子サマはここに移転。いまこの媽祖はせいせいしているはずである。また沖縄には未見であるが久米島に天后堂がある。

**西日本**の媽祖は、媽祖堂が寺院になった**長崎**の唐三寺を筆頭に多くの媽祖像があるが、しだいに来航する唐船の数が増加して、郷幫（同郷出身者組織）が結成されると、その集会所に安置されるようになった。この集会所が後に唐寺として整備されていく。しかし長崎は江戸期に発展するが、それ以前からあった媽祖像（媽祖廟）としては、倭寇の本拠であった**平戸**と**五島列島**が先行する。「**五峰**」王直の井戸や銅像があり、鄭成功の生家にも媽祖像がある。

**鹿児島**の**野間半島**とその周辺にはかなりの数の媽祖像が伝わっている。そもそも「**のうま**」という地名じたいが「**媽**」から出たものである。薩摩は東シナ海の「**裏街道**」に接続し、中世「**硫黄ルート**」ともかかわる。王直の船が種子島に「**てつほう**」を伝えたことはその象徴的できごとであろう。島津氏の本貫は内陸の盆地**都城**である。ここに「**唐人（とじん）町**」があったことがあまり知られていないが、都城歴史資料館（島津氏の城跡）に天水家のボサ（菩薩でもあり媽祖「**ぼそ**」でもある）が展示されている。都城の古地図には唐人墓地が記され、華人集団がここにいたことがわかる。ちなみに都城華人集団をルーツとする企業が霧島酒造である。

東日本の媽祖のうち新しいものをいくつか挙げる。きっかけは箱根観音で知られる**福寿院**（曹洞宗）である。台湾の2人の尼僧を受け入れた縁で北港天后宮から媽祖像を迎え、いまの住職の代になって李登輝氏の父君金龍氏揮毫の扁額を掲げた戒壇を設置した。福寿院は2007年まで箱根湯本の温泉街で中華街から学生らを迎えて媽祖行列を行っていた。

かつて箱根の媽祖と関係があった台湾系の日本媽祖会が建てたのが小岩の**東京朝天宮**（小岩駅南口のビルの1階）で、東京下町の台湾系おばさんたちがお参りにやってくる。ただし日本媽祖会はいま箱根福寿院とは関係が切れている。最近復活した媽祖として青森の大間があり、海の日ごろに媽祖行列をはじめたが、それについては後述する（大間の媽祖行列は最初に箱根観音福寿院から道具を借りて始まったとのこと。のちに台湾北港天后宮から道具を入手したという）。

**横浜媽祖廟**は、中華街有力者の基金で2008年に華々しくオープンした。もともとはマンション反対運動から始まり、清国公使館跡であった山下町公園の一角に壮大な廟を建てた。横浜媽祖廟は極めて商業ベースの廟であり、關帝廟とは異なり横浜開港の歴史とは何ら関係がない。媽祖信者と言えるよ

うな人々も存在しない日本人観光客向け施設に過ぎないが、考えてみればアジアのいたるところで起きた華人の便乗商法の一つであるともいえる。同様の動きとして東京媽祖廟が2013年に大久保駅南口に建てられたが、ここは中華料理店のビルの1階である。



### 3 媽祖のバイオグラフィー

海難救助の女神さま媽祖のストーリーはアジアではよく知られている。福建の莆田市湄洲島に「実在」した巫女で、口数が少ないが幼い時から靈感を発揮して父や兄の命を救った「林默娘」という巫女。女性であるから本名は不明でファミリーネームしか伝わっていない（家系が官を輩出する名家であったというのは「後付」）。生年は宋の建隆元（960年）3月23日、没年は宋雍熙四（987年）9月9日とある。生年960年とは宋の建国年であるから後世のつじつま合わせであろう。宋代の公的記録は少なく、後代の史料によって推測するしかないが、宋代を通じ少しずつ廟が増え、莆田市をこえて福建共通の信仰対象となったようだ。海を重視した宋朝による封号「崇福夫人」「靈惠妃」が贈られたが、ここまでは地域神レベルにとどまる。

なお宋代のうちに媽祖に大きな変化がおきている。それが観音菩薩との習合である。浙江省普陀山（中国沿岸では島は山と表記する）には「日本行きを拒否した観音様」が祀られ漁民の信仰対象となっていた。伝承によればこの故事の年代は媽祖に先行する916年。普陀山付近は遣唐使の港寧波（慶元・明州）があり、いわば渡海センターであった。おなじように海に出てゆく福建との「仏と道」の習合が実現し、「媽祖観音」「媽祖菩薩」にパワーアップした。媽祖は西日本では「ボサ」と呼ばれ、前述したように「媽」の発音は「ぼ」。私見だが「ボサツ」と「ボソ」の近似性があると思う。似ているから同一視されたのか、発音の問題は詰めてゆく必要がある。

#### 4 媽祖の国際化 元・明の贈封

とはいえ、媽祖は「福建ローカル」であった。ところが元代に「天妃」が贈封号される。契機はモンゴル。世祖クビライの海陸ネットワーク結合構想である。大都～外港直沽から海に出て南下し、江南物産を運び込むルートを確認すると同時に、東南アジア経由でインド、西アジア・アフリカへの通商ルートへ連結するという構想である。すばやく帰順した福建出身の官僚たちがこの構想に積極的に賛同し、クビライも彼らを登用し「魚心あれば水心」、両者の思惑が合致したときに海上交易（まだ中国海域限定だが）の航海安全の守護神として媽祖が注目される。各地の媽祖廟の祭礼には官を派遣して国費を支出、すなわち国家公認の神へランクアップする。

南宋滅亡2年後の1281年（弘安の役！）、「護国明著天妃」という神号が最初である。1354年には「輔国護聖庇民広済福恵明著天妃」となり、媽祖はどんどん北上し、山東・遼東にも媽祖廟が建立されていく。

明代はいわゆる「大交易時代」。明朝は元の構想をそっくり受け継いでいく。洪武帝にはそんな余裕はなかったが、クビライを師と仰ぐ永楽帝は朝貢貿易の守護神化を推進した。まず媽祖の国外輸出が起きる。琉球王国の上下天妃宮は初の国外媽祖であった。朝貢体制に忠実な琉球王国には明の官人が派遣されたので儒教とともに媽祖を受け入れ、後述する明清交代を乗り越え「天妃」という呼び名を維持した。

鄭和の「西洋下り」は華人進出の始まりである。マラッカ王国の思惑どおりに明のプレゼンスの拠点となって大量の華人流入と定着が始まった。鄭和がムスリムであったことが強調されるが、何万人もの中国人（兵士・商人・船員）のうちマラッカに残ったものが最古の「青雲亭」を建てた。

明朝の海禁・朝貢政策は、代価として私貿易の横行をもたらす。倭寇（後期）は多国籍海上集団であって今日的なナショナリティを問うことに意味はないが、媽祖を中心に据えた点では宗教結社に近いかもしれない。彼らの活動拠点は寧波・舟山列島、平戸・五島列島におよんだが、媽祖が彼らだけの守り神であったという認識は誤っている。元代以降は「官民」とともに媽祖を祀る風習が定着し、敵味方関係なしに信仰が広まった（海の嵐はだれでも平等に襲う）から、単なる民間信仰ではなかった。倭寇もそれを討伐する官軍も双方が守り神としていた。それは後述する鄭氏家臣（芝龍に従って成功と袂を分かった）にして台湾平定の功労者であった施琅にも見ることができる。

江戸期になり日本の外国船寄港地が平戸から長崎に替わるが、やってきた多数の唐船も乗組員はおなじであった。そもそも倭寇が消滅したと言う通説は誤りであり形を変えたのである。「鎖国」体制でもシャム船・アンナン船は来ている。これらは倭寇の衣替えである。そして長崎の3福寺（崇福寺・興福寺・福濟寺）はもともと唐人が寄港した際の「ボサ挙げ」媽祖堂が起源であり、のち曹洞宗と臨濟黃檗派の唐僧が来日し寺院としての体裁を整えたのである。

#### 5 「華夷変態」と日本への亡命者。そして天后へ

王朝名の呼び方は「とう、そう、げん」であるが、明清は「みん、しん」というのはなぜか。前者は帰国した日本人が漢字を「日本読み」で記したからである。それに対し後者の場合はネイティブ中国人が来日して「中国読み」をしたためと思われる。すなわちかなりの中国人が日本に来たことがうかがえる。その原因は明清交代すなわち「夷狄」満洲族の大清が長城を越え、滅亡した明に替わって中国を統治した「華夷変態」に起因する（「清が明を滅ぼした」ではないが、張振甫の例もあるのでこのところはどっちも正しいかもしれない）。来日時期は大まかにみると2回ある。

第一期は1630年ごろから明滅亡直後1645年ごろまで。1616年の大清国（ダイチン・グルン）の建国で東北辺境は明朝から離脱し戦乱が始まる。すでに国内では農民反乱・宗教反乱が頻発してもはや全土をコントロールできる状態ではなくなった。この戦乱と混乱を避けた「文人」と「貴人」が日本に亡命してくるのである。注目すべき人物は以下の3人。

**陳元贊**は1627（寛永四）年には尾張に来ていた。書道・漢詩・作陶・柔術を伝えた文化人であった。

明清交代の10年後の1654（承応三）年に来日した**隠元隆琦**は臨濟宗黃檗派の僧で、京都萬福寺を

創建し黄檗宗の開祖となった。インゲン豆で有名だが、彼は鄭成功の仕立てた船で来日している（当時は鄭氏船が海域で一番確実な輸送手段であった）。どうやら彼は明復興と対清戦線構築を日本在住亡命者グループと図っていたらしい。

**張振甫**は隠元に先行している。1647（正保三）年に来日し、御三家筆頭の尾張徳川家お預けとなり、代々尾張藩の御医師を継承し、その住居が「千種区振甫町」として残っている。

張振甫の来歴は最近まで知られていなかったが、張家 10 代目の張房雄氏が家伝資料を整理し、台湾の研究者の協力を得て先祖が判明した。1986 年出版の翻訳本『明朝末帝の日本亡命—三百余年後の今日漸く真相判明』によれば、張振甫とは明朝末帝の朱慈娘で崇禎帝の三男（通説では長男）であった。

通説では 1629 年に生まれ 1644 年に死去、崇禎帝死後に呉三桂が擁立し 45 日間帝位にあったが、「ドルゴンに殺された／病死」とされていた。ところが幕府の記録では 1647（正保三、清順治四、明永暦元）年、一族郎党計 360 人が同乗した戦闘装備の「広東船」3 隻で長崎へ来航した。船長船員はポルトガル人であったという。驚愕した幕府は近親 30 名ほどだけを受け入れ、それ以外の者は退去させたとある。幕府は審議のすえ、清との関係を考慮し尾張藩を受け入れ先とし、この事実を公としなかった。

この事実は内閣文庫所蔵「正慶承明記」で考証され、「オランダ商館長日記（ハーグ国立中央文書館所蔵）」にも記録されている（偶然傍観した商館長が一部始終を日記に残した）。のち叔父の福王朱由菘も来日し尾張に同居しているから、尾張藩には明の亡命皇族コロニーがあったことになる。陳元賛受け入れの「第 2 幕」であろう。朱慈娘は「張」氏と改姓し、1680（延宝八、清康熙十九）年に死去した。なお張房雄氏は波里光徳というペンネームで気学関連の書籍を残しているが 2003 年に死去した。

第二期は 1650 年代後半から。鄭氏政権の抵抗～本土退去と台湾進出の時期に当たり、反清復明の義士たち（すなわち軍人だったもの）がやって来る。本土での抵抗に見切りをつけたものもいれば、鄭氏の外交エージェントもいる。外交エージェント代表が朱舜水（1600 年～1682 年）である。

舜水は 1659（万治二）年に鄭成功の南京攻略戦に参加し、失敗後に「乞帥」すなわち日本請援使として鄭氏船で長崎に派遣された。1661（万治四、寛文元、清順治十八）年に光圀に同道して水戸藩に赴き「光圀のアドバイザー」となるが、終生日本語を話さず儒学者としてのプライド（夷狄のコトバを口にしない）を保った。彼の業績（ラーメン！）はよく知られているが、徹底した「反清」「攘夷」の姿勢が 2 年前に始まった『大日本史』編纂に方向性を与えて水戸学を生み、幕末にそれが実現したことになる。東大農学部構内には「朱舜水終焉の地」の碑があり、常陸太田市の瑞龍山（水戸家の墓所）に永眠している。

このあと鄭氏政権は劣勢を余儀なくされる。朱舜水が水戸へ移った 1661 年、鄭成功は台湾に移動し VOC を退去させるが、清は対抗策として「遷界令」を出し海岸線を封鎖した。海岸の住民を 15 キロ内陸へ強制移住させる「日干し策」は発掘調査で実行が確認されている。翌 1662（康熙元）年、鄭成功は媽祖廟を台南に一つ作って死去する。

朱舜水が病に伏せていたころ東臯心越が来日する。心越は 1639（崇禎十二）年生まれ、没年は 1695（元禄八）年。杭州西湖の永福寺を出て抗清活動に参加し、そのはての亡命であった。1676（延宝四）年に薩摩に着き、翌年長崎の興福寺に逗留、紆余曲折を経て 1681（延宝九、天和元 清康熙二十）年、長崎から江戸水戸藩別邸へ移った。1681 年は台湾鄭氏政権では鄭經が死去し鄭克塽が継いだ年で、本土では呉三桂の孫の呉世璠が自殺して三藩の乱が終結したため全力をあげての台湾攻略が可能になった年である。もはや鄭氏政権に希望はなくなったのが見えていた。1683（天和四 清康熙二二）、台湾はかつての鄭芝龍の部下で、芝龍が清に降じた際に成功と袂を別った施琅將軍により制圧された。これが契機となり媽祖は再び変化する。

チャイニーズ・タイペイ政権は鄭成功を「延平郡王」という民族英雄に祀り上げ、篤く信じた媽祖信仰を対中国防衛のシンボルとしている（台湾の軍艦には「成功級」というクラスがある）。媽祖の「政

治化」は、蔣介石が国民党を率いて台湾に逃亡していわば国策になった。

台湾独立（あるいは自立）を主張する人々は「成功が台湾に媽祖を持ち込んだ」という。しかしこれを覆すのが「鄭成功の建てた媽祖廟はひとつだけ」という事実である。現在の「開基天后宮」がそれで、もともとは「天妃宮」であったはず。

媽祖が台湾全土に広がるのは鄭氏政権崩壊後である。施琅の台湾経営はまず民心の慰撫にあった。そのシンボルとして敵味方共に信じた媽祖を利用し、ここで媽祖信仰は「国策」となった。

清の媽祖への贈封号は計 16 回なされている。年号は 1680（康熙十九）年から 1872（同治十一年）までなされている。

第 1 回目は 1680 年の「護国庇民妙靈昭應弘仁普濟天妃」。台湾鄭氏政権はまだ存在していた。

翌年 1681（康熙二〇）年、「昭靈顯應仁慈天后」ここで天妃から天后へのランクアップが実現。前述したように三藩の乱の平定が完成、台湾鄭氏もこのとき代が替わり鄭克塽は抵抗をやめた。

1683（康熙二二）年、鄭氏がとうとう帰順。

1684（康熙二三）年、「護国庇民妙靈昭應弘仁普濟天后」1680 年の天妃の封号をそっくり天后という神号に入れ込んで神格を UP させ、台湾統一の靈驗神助の功を讃えた。この時施瑯が建てた最初の天后宮「台南大天后宮」は前述した。

ここから台湾の媽祖ラッシュが始まる。そして皇帝の被る 12 本の簾冠（冕べん）にあわせて「天后」は 9 本簾の冕を被るスタイルとなる。9 本簾の冕があるかどうかは媽祖がいつここに来たかをあらかず。台湾は「天后」、沖縄は「天妃」、水戸の場合は「天妃」（「反清」であるから「天后」を認めない）、東南アジアの場合にはあとからやってきた華人が「こっちのほうが派手でいいね」ということで「天后」がほとんどである。その意味では沖縄と水戸は最後に残った「天妃」ということになる。

最終形は 1872（同治十一年）年の「護国庇民妙靈昭應弘仁普濟福佑群生誠感咸孚顯神讚順垂慈篤祐安瀾利運沢覃海宇恬波宣惠導流衍慶靖洋錫祉恩周德溥漚衛保泰振武綏疆天后之神」である。

媽祖はいま「天上聖母」という称号で呼ばれている。台湾でも本土でも東南アジア諸国でも信じられているのが、「道光帝による天上聖母追加封号」である。しかし清朝の記録にはない。19 世紀に民間で使用されはじめた称号であるが公式神号ではない。おそらくどこかの道士による創始で、具合がいいので定着したと思われる。



## 6 徳川光圀と東臯心越

Wikipedia の肖像画「心越肖像」（椿椿山作）は東京国立博物館所蔵のもので、頬がこけ痩せた正面の姿である。しかしこれは心越が若い時に南京天界寺で出会った覺浪道盛禅師の頂相そっくりである。心越はこの画を手元に持ち続けて来日し祇園寺に残した。その「金陵天界覺浪老和尚眞像」が心越禅師遠忌百五十年（1846 年、弘化三年）の際に「籠写し」されて、江戸の椿工房で彩色されたようである。覺浪眞像が心越死後の年月を経て損傷していた可能性もあるが、取り違えと誤解は幕末の水戸藩の混乱によって起きた面もある。

彼の頂相は水戸の祇園寺（旧天徳寺）に 2 つあり、いずれもふっくらとした顔立ちで、塑像も存在している。TV ドラマの「水戸黄門」では、2001 年に放映された第 29 部の第 6 話「危機一髪！影武者大作戦・高崎」に登場する。心越役は 69 歳の山田吾一（1933～2012）。山田吾一は水戸黄門シリーズには第 1 部（1970 年）から 37 部（2007 年）までたくさんの役で計 16 回も出演している。

心越の俗姓は蔣、名は初め兆隱のちに興壽（興は父の最初の一字なので「名」でなく法名）、心越は

字、東皐は号で別号に樵雲・越道人がある。浙江省浦江県生まれで、仏門に入り報恩寺で修行。清の圧政から逃れて杭州西湖の曹洞宗永福寺を出て日本に亡命し薩摩に入る。彼もまた一時鄭成功の軍に属し、朱舜水とおなじく南京攻略失敗で離脱し日本に亡命してきた。同郷であった黄檗派の澄一禅師の招聘により 1681 (延宝九) 年に長崎の興福寺に住み、京都黄檗山萬福寺を訪ねるなど各地を遊歴し、さらに江戸へ向かおうとしたが黄檗派との確執で長崎興福寺に禁足された。

1683 (天和三) 年、徳川光圀にヘッドハンティングされて江戸で朱舜水 (死去の前年) に面会、その後水戸天徳寺に居住した。のち光圀は心越のために天徳寺を他所へ移し、新たに寿昌山祇園寺とした (曹洞宗寿昌派)。彼は篆刻や古琴 (七弦琴) を日本に伝え、日本の琴楽の中興の祖、また日本篆刻の祖とされる。

彼は関東各地を訪れて多くの扁額を残している (いわば揮毫マニア)。神奈川にも 3 つの寺 (横浜 2 = 雲松院と霊松院、藤沢 1 = 玉雄山寶泉寺) に扁額を残す。鎌倉では「金沢八景」を撰し (『新編鎌倉志』) たりしているが、高崎に行ってはいない。藩主酒井忠孝の新寺建設のため行くはずであったが、病のため弟子天湫法澧が赴き禅道場を建てている。この道場が心越死去後の 1731 (享保十六) 年、寺に昇格した (少林山達磨寺通称だるま寺、心越はここに分骨されている)。「高崎だるま」は、天明の大飢饉の惨状を見て当時の住職東嶽光照が心越の描いた「一筆だるま」を手本に作った張子を農家の副業として販売させたことに始まる。

元禄七年死去 (享年 58)。墓所は祇園寺の境内にある。彼こそ光圀が見つけた「朱舜水のあとがま」であった。

心越が水戸に持参した「2 体の媽祖像」は、「ボサ挙げ」で興福寺にあったストックであろう。元禄三年に「磯原」「磯浜」に置いたと記録されているから、いま水戸祇園寺 (旧天徳寺) にある「媽祖菩薩」は、そののちに長崎から再入手したものと考えられる。本体は (中国製の可能性はあるが) 長崎在住の華人仏師に作製させ、それを日本人仏師が修理したものらしい (脇侍の千里眼、順風耳は日本製)。また媽祖が被る「冕 (べん・かんむり)」は黄檗宗系の唐寺のものとも共通している。

徳川光圀はなぜ朱舜水や東皐心越のような人物を水戸に呼んだのだろうか。中国文化の導入だけとは到底思えない。ちょっと前までは朝鮮で明軍と戦っていたし、家康も李朝との国交回復を外交課題としてきた。彼ら 2 人は激動の東アジア国際外交の体験者で、幕府自体も明清交代という政変を注視していた。光圀 (まだ光圀ではない) 元服の年 1636 (寛永十三) は、李自成が闖王を称しホンタイジが大清を建てた年で、翌年には島原の乱がおきている。

鄭氏の動向は長崎からいやというほど入ってくる。そしてポルトガル人の来航を禁止 (1639 寛永十六)、オランダ VOC を出島に移す (1641 寛永十八)。幕府は国際感覚がないわけがない。この情報ニーズが 2 人を招聘する第一の理由である。予想される清のプレゼンスにどう対処すべきか。

1688 年 3 月 (貞享五年 2 月、元禄元年)、光圀は巨艦「快風丸」を蝦夷に派遣している。この船の建造は 1682 (天和二) 年から 1685 (貞享二) 年までかかり、翌年から都合 3 回の蝦夷地探検がなされ、これが 3 度目。那珂湊を出航し石狩川まで到達している。しかし 3 年分の食料を積載していながら 40 日で帰還し成果はそれほど無かった。快風丸は光圀の没後 3 年の 1703 (元禄十六) 年に廃船となっている。

快風丸の模型が水戸私立博物館にある。『快風丸渉海記事』によると和船構造で安宅船や伊勢船とおなじで四角い船首を持ち帆艫を併用 (艫は 40 丁運用) した。全長 37 間、1 万 2000 石 (実搭載量 7600 石)、実際は 5600 石 (実搭載量 3300 石) との説もある。屋形の上に「あんじん箱」という方形の櫓があり磁石や海図を備え、船内には心越筆の「快風丸」の大額 (1 間余り) が掲げられていた。

快風丸は当時現役の日本船では最大の船で、江戸幕府が保有した超大型軍船「安宅丸」を凌駕していた。大船建造の禁に抵触するはずであるが御三家で特例が認められたものと考えられる。

第 3 回航海の年である 1688 年は何があったか。北方では清と南下してきたロシアが接触し交戦状態になっていた。水戸藩のみならず幕府経済の大きな財源である蝦夷交易に必須な「北の安全」を脅かすかもしれないロシアと、東シナ海へのプレゼンスを強めた清が、満洲族勃興の地沿海州のすぐ隣



でネルチンスク条約を結ぶのは翌 1689 年である。沿海州と蝦夷地は「一衣帯水」。この時期に航海がそれと無関係であったとは思えない。そして蝦夷・北方情報の入手先は長崎以外には考えにくい。海外情報はオランダ以外に唐船（帰順しても乗員は旧鄭氏人脈は生きている）から入手できたはずで、幕府中枢にいた光圀ならば不可能ではない。なによりも清への危機感を持っていたのが亡命者舜水・心越ラインである。

2013 年発売の『光圀伝』は、『天地明察』で脚光を浴びた沖方丁の最新作で、光圀の生涯を描いた大作である。朱舜水に関する部分は反逆児であった光圀を導いた「人生の師」のようにもちあげている。ところが舜水を引き継ぐ心越の登場はたった 1 度だけである。この時代の国際情勢についての言及はほとんどない。温厚な黄門様（大人になっても家臣を手打ちにしたりしているのだが）が実は若いころやんちゃだったけど舜水と会って……という話で、黄門ファンや水戸の地方史家ならこれでも満足するかもしれないが。



## 7 水戸藩と天妃のひろがり

1671（寛文十一）年、河村瑞軒によって東回り航路が開かれた。だが房総廻り航路は遭難が多く、蝦夷地から南下した船は大洗に到達し、那珂川から 2 つのルートで物資を江戸に運んだ。すなわち「利根川東遷」とドッキングした。

- 1) 大洗～涸沼～霞ヶ浦～横利根川～利根川～江戸川・荒川ルート（霞ヶ浦水系）
- 2) 大洗～鹿島～常陸利根川～潮来佐原香取～利根川～江戸川・荒川ルート（北浦水系）

のちには銚子まで下ってダイレクトに利根川遡上ルートも行われるようになる。また那珂川を遡上して水戸から街道を陸送するルートも派生する。

東回り航路の安全確保のニーズに対し、光圀は拠点となる港と航海の神を用意した。それが那珂湊と媽祖（天妃神社）である。

那珂川河口の**大洗磯浜天妃神社**は 1690（元禄三）年創建とされる。「新編常陸國誌」によると、元禄元年、那珂湊対岸の沖ノ洲を「祝町」に改め、隣にあった浄土真宗岩船山願入寺に寄進し、翌年沖ノ洲にあった宇佐八幡神社を大洗磯前神社に遷し（光圀の「八幡つぶし」は寺社改革の目玉だった）、翌元禄三年に祝町の那珂川河口に天妃神社を建立した。元禄九年の「鎮守帳」によると神主は大洗磯前神社と対岸の湊村榎原神社が交代で務めた。媽祖像は高さ 20cm で左右に侍女を配していた。後述磯原、七ヶ浜、大間に共通するスタイルで水戸祇園寺のものとはあきらかに違う。祇園寺天妃尊の日本製説が出てくる所以である。

願入寺は東本願寺から住職を迎えた光圀肝煎りの寺である。この場所は宗教と遊興（祝町には「茶屋」遊郭が設けられた）を担当し、対岸には「快風丸」の母港那珂湊が整備され、水戸藩の経済・文化センターとなった。

磯浜天妃神社是那珂川河口の海門橋のたもとにあり、海門橋はよく落ちた（現在の橋は 5 代目）。

そして昭和十六年からの工事で隣のドンドン山と呼ばれる高台に移転し河口を見下ろしている。那珂川河口は涸沼ルートにつながる「交通の結節点」で、そのまま那珂川を遡上すれば水戸に直行できた。1690年とは光圀が隠居し、そして心越が天徳寺に入った年である。心越の持参した媽祖像はここに置かれ、水戸の経済を支える那珂湊の航海の守護神となった。

北茨城市磯原には海に突き出た天妃山があり、**磯原天妃神社**には心越が持参した2つ目の媽祖像を祀る天妃神社がおかれた。創建は1690(元禄三)年というから大洗の天妃神社と同じ年である。神社記録ではこちらのほうが先であるという歴史改竄がなされている。磯原天妃神社は燈台を持ち航海の目印の役を果たしたようである。

少し北に五浦(いづら)の岬と大津港があり、岬の上には同じような航海安全の役割を果たす佐波波地祇(さははちぎ)神社があつて漁民の信仰を集めていた。創建を九~十世紀とするこの神社は光圀の蝦夷派遣船(快風丸か?)の遭難を伝え、救助したことで光圀から神鏡奉納を受けている。磯原天妃神社とこの神社はごく近い(直線距離で7kmぐらい)。近すぎるから天妃神社は佐波波地祇神社の境外末社であつたと思われる。創建当時はわからないが佐波波地祇神社の宮司は天妃神社の宮司を兼ねているので、日本古代史に関心があつた光圀が「清和帝」に正六位を贈られた佐波波地祇神社に憚って「唐神」を近くの別の場所に置いたと思うがどうであろうか。

鹿島灘の下津(おりつ)海岸から少し入った宮津台にも**下津天妃神社**がある。すぐ近くにはがんらい海神を祀る鹿島神宮があり、その支社になっている。地元では鹿島の「祭頭祭」の出発地(終点は鹿島神宮)として知られている。この神社の詳しい調査はされておらず媽祖像も確認されていないが、敷地内の普賢寺(廃寺)に史料があるかもしれない。鹿島神宮がいわば水戸藩公認の天妃を取り込んだ可能性もある。

那珂湊~涸沼~霞ヶ浦北岸ルートに位置する小川町(現小美玉市)には幕末まで**天聖寺**があつた。この寺は1707(宝永四)年に祇園寺3代住職の嵐山が隠居し開いたかなり大きな寺で、天狗党の拠点となり争乱で廃墟化、明治三年の大火で廃寺となって墓地だけが残っている。ここには天妃尊廟があり、廟の隣には媽祖像写真とその紹介看板が立てられている。像は大火の際に救出され檀家総代が保持していたが、昭和五一年に新しい斎場が建設された際にいまの廟を設けた。説明文によると「心越禪師が日本に来る際に持参したものを光圀の命で3体複製しそのひとつを天聖寺に持参した」とある。普段は施錠され中を見ることはできないが、木製で高さは35cm、脇侍4体(女性2童子2)を含め日本製である。

水戸藩の船が寄港した東廻り航路の港にも媽祖の発見がある。船は北上してまず仙台に寄港するので、仙台藩は水戸と海でつながっている。松島**七ヶ浜**字松ヶ枝の通称御殿崎には**荒崎稻荷社**がある。ここに「媽祖の板絵」が伝わっている。由来書によれば仙台藩藩士瀬戸一道齋が藩米回送業務で平潟港(前述大津・五浦の北側で福島県境)に寄港した際、磯原天妃神社別当行蔵院の実兄であつた地主鈴木茂右衛門から1784(天明三)年に板絵を入手して持ち帰り、1795(寛政七)年にここにあつた稻荷に合祀した。分祀天妃神の板絵は、中央に天妃、両サイドに長い扇(翳えい・きぬがさ)をかざした侍女が立ち、媽祖の配下となつた千里眼・順風耳ではない。この板絵は神社を管理している旅館の経営者(七ヶ浜町文化財審議委員長)が保管している

マグロの町で知られる青森県下北半島の大間には**大間稻荷神社**があり明治期にも知られていた。明治九年に神主がまとめた「天妃大神社録」によれば、1696(元禄九)年に、名主伊藤五左衛門が「天妃媽祖(大)権現」を勧請して天妃神社とし、当地の修験者が別当として管理していたが、明治六年、神仏分離・廃仏毀釈により稻荷神社に合祀されたとある。合祀後も稻荷神社の祭礼は3月23日(媽祖生誕日)と7月23日(漁の開始日)に行われてきた。

どこから勧請したかについて縁起は「薩摩野間から」と伝えるが、江戸期の史料「御領分社堂」では大洗天妃神社からの分祀とあり、心越の次の天徳寺(祇園寺の前身)住職であつた呉雲の朱印から確実視される。この媽祖像は前述七ヶ浜の板絵と同じく2人の侍女を従えている。残念ながら翳は失われているが、20cmを超える大きさで色彩もかなり残っている。

媽祖の存在が地元にも知られるようになった1996（平成八）年、大間遷座三百年を記念して媽祖行列が行われた。のち台湾北港天后宮の協力を得て、毎年海の日（7月第3月曜）に開催され、いまは台湾からの観光客も訪れる一大イベントになっている。



おわりに

朱舜水路線（＝水戸学）の結実は幕末の「尊王攘夷」である。幕末の外交の危機が迫るなか 1843（天保十四）年、藩主徳川斉昭は日本古来の神道を中心に置く国粹主義的な神社改革を断行した。大洗の天妃にも磯原の天妃にも大きな変化が起きる。「異朝の神」と見做して天妃像を回収し、日本の海難救助の女神「オトタチバナヒメ」に神社名も変更されてしまう。大洗磯浜天妃神社は「弟橘姫」神社へ、磯原天妃神社は「弟橘媛」神社へ。

回収された媽祖像はどこへ行ったのか。磯原天妃神社の場合は地元磯原村の漁師たち中心となり、1845（天保十五、弘化元）年、すなわち斉昭が謹慎となった翌年、天妃像返還の嘆願をだした。このときに天妃像が返還されたかは不明である。だが明治期には神社に天妃像が祀られていた。それが返還されたものかは微妙なところである。

この宮司を兼ねた大津佐波波地祇神社に写真が所蔵されている。それを見ると黒面の媽祖像で団扇の位置も通常と異なり補修の跡が見えるので、返還されたのちに新調されたか、あるいは改めて製作したものかもしれない。藤田氏の報告では厨子に嘉永二（1849）年3月寄進と記されていて、実物は拝観不可だが佐波波地祇神社に遷されているとのこと。ところが筆者が佐波波地祇神社の宮司に尋ねたところ、実物を見たことはなく、ここにはないという話であった。さらに、天妃像は磯原にあるが個人が所蔵しているという。残念ながらその個人が誰なのかを聞くことはできなかった。

大洗の磯浜天妃神社にあった像は祇園寺へ戻されたと思われるが、祇園寺の歴代藩主の位牌の前に安置されている前述の天妃尊とは姿かたちが違うので「行方不明」ということになる。おそらく廃棄されたとみてよい。だが地元の祝町では昭和十七年の改修工事で移転した後も神社を「天妃さん」と呼びつづけている。だが多くの人はずいぶん天妃というかは忘れてしまっているようだ。いまでは旧暦3月23日に行っていた祭礼を4月第3日曜日に移したが、改造バスを山車に仕立て、祝町の氏子たちは揃いの天妃を大書した法被を着て盛大に天妃祭りを続けている。

## 現在の研究状況

天理大学の藤田明良氏は媽祖研究の第一人者で、現在彼の媽祖探しは北前船の行きかった北陸にもおよんでいる。「北陸に将来された媽祖たち <http://ci.nii.ac.jp/naid/40017253467>」

媽祖はここでは「船玉信仰」の神として信仰対象となった。富山県射水市放生津は北前船の船主の湊であり、媽祖像が財を誇った北前船の船主たちの蔵のなかからぞくぞく発見されている。彼らが大阪へ物資を運ぶ際、九州の廻船から媽祖のことを聞き長崎から持ちこんだもので、明治期まで船の守り神として祀っていた。従って福井や富山だけでなく新潟や秋田にも媽祖像があると思われるが、それは藤田氏の調査待ちである。

## おわりに変えて

荒川水神社に「天妃宮」が建てられた経緯はこれまで述べてきた水戸藩の公的な由来とは全く関係がない。水神社の祭礼は4月23日（現在は農繁期を避け5月23日）で、荒川地区在住の神主が神事を行っているが、最近は盛大になり芝居も行われている。かつては木内氏が神主を務めていたはずである。窪徳忠氏によるとご神体は笏を持つ木製の媽祖像で二人の女性脇侍を従え、容貌や服装は明らかな日本製であるという。しかし藤田氏は、冠の飾りの跡が残っているということから、九州の中国系船菩薩か、江戸期になってから輸入された天后文献（当然長崎から、そして清公認の）に由来するものとしている。すなわち水戸藩のものに倣った「天妃」ではない。

山伏が持ち込んだという説と地元の旧家吉田家が銚子から持ってきたという伝承、そしてすぐ近くを流れる横利根川で漁師の網にかかったという記録もある。横利根川は霞ヶ浦水系と利根川をむすぶ重要なルートであり、荒川集落じたいが船を使って行き来をしなければならない「水郷地帯」であったから（すぐ北を流れる常陸利根川の向かい側が「潮来」である）、天妃情報が霞ヶ浦水系から入ってきた確率が高い。天聖寺のあった小川町（現小美玉市）もまた霞ヶ浦水系であった。北浦水系に属する大洗からは距離があって関係性は薄い、鹿島や下津からはすぐであるから、そこからの情報（天妃おいう有難い神様がいる）という可能性もあっただろう。

詳細はまだ不明な点が多いが、利根川の堤防修理にかかわった山伏系の広範な情報網がもたらした信仰のかたちであることは想定される。藤田氏の調査では荒川地区から鹿島方面にかけて石を天妃として祀るところが4例あるそうで、筆者も房総東部～利根川南岸の白井市・匝瑳市・横芝町に「天妃」らしい石碑があることを確認しているので、今後現地調査をしてみたい。

## 《参考文献》

### 書籍・論文

『航海神—媽祖を中心とする東北アジアの神々』藤田明良「海域アジア史研究入門」桃木至朗編 岩波書店 2008

『媽祖と中国の民間信仰』朱天順 平河出版社 1996

『道教と東南アジア華人社会』坂出祥伸 東方書店 2013

『東臯心越—徳川光圀が帰依した憂国の渡来僧』高田翔平 里文出版 2013

『明朝末帝の日本亡命—三百余年後の今日漸く真相判明』徐堯輝 監修波里光徳（張房雄）編 千歳書院 1986

『東シナ海文化圏—東の＜地中海＞の民俗世界』野村伸一 講談社選書メチエ 2012

『東南アジアのチャイナタウン』山下清海 古今書院 1987

『チャイナタウン—世界に広がる華人ネットワーク』山下清海 丸善ブックス 2008

『都城唐人町—海に開く南九州 16～17世紀日中交流の一面』佐々木綱洋 みやざき文庫 2009

『光圀伝』沖方丁 角川書店 2012

『媽祖信仰與神蹟』謝進炎・何世忠（安平鎮工作室） 世峰出版社 2001

『望郷の詩僧 東臯心越』杉村 英治 三樹書房 1989

『於江戸時代東日本天妃信仰の歴史展開』藤田明良 「媽祖信仰文化暨在地人文芸術—國際學術檢討會論文集」江寶釵主編 財團法人北港朝天宮〔臺灣嘉義縣〕2013

## WEB系

<http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/>

「媽祖と観音：中国母神の研究（二）」平木康平 大阪府立大学紀要（人文・社会科学）1984

<http://www.nishogakusha-kanbun.net/03kanbun-356jyo.pdf>

「心越禅師と徳川光圀の思想変遷試論—朱舜水思想との比較において—」徐 興慶

[http://www.icis.kansai-u.ac.jp/data/journal02-v1/10\\_takahashi.pdf](http://www.icis.kansai-u.ac.jp/data/journal02-v1/10_takahashi.pdf)

「日本における天妃信仰の展開とその歴史地理学的側面」高橋誠一

[http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10129/3511/1/Rekishish\\_23-24\\_16.pdf](http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10129/3511/1/Rekishish_23-24_16.pdf)

「東日本における天妃信仰の伝播—東北地方に残る道教的借仰の調査報告」秋月観暎

<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/tabunka/journal/1-4-2.pdf>

「拡大する中国世界—媽祖信仰というカギで解いてみると—」樋泉克夫

[http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/154124/1/jor044\\_3\\_538.pdf](http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/154124/1/jor044_3_538.pdf)

<批評・紹介>李獻璋著「媽祖信仰の研究」日比野丈夫

<http://www5b.biglobe.ne.jp/~a-fujita/masol.htm> 「日本の媽祖信仰と南薩摩の媽祖像」藤田明良

[http://www.sof.or.jp/jp/news/151-200/175\\_3.php](http://www.sof.or.jp/jp/news/151-200/175_3.php) 海洋政策研究財団 海の女神「媽祖」三尾裕子

<http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/education/IV-1%E9%A3%AF%E7%94%B0.pdf>

名古屋大学人文学フィールドワーカー養成プログラム調査報告「横浜媽祖廟建立の背景から見た中華街における役割」飯田樹与（聞き取り調査に誤りあり）

[http://pub.ne.jp/zaza/?cat\\_id=105833&page=4](http://pub.ne.jp/zaza/?cat_id=105833&page=4) 利根川東遷物語 1～3 2

<http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/nourin/naisuisi/kahoku/rekishish.htm> 茨城県 HP：年表

<http://members.jcom.home.ne.jp/bamen/ichizoku41.htm> 千葉一族「木内氏」

<http://www.rekihaku.ac.jp/about/books/1.html> 「義民の世界 佐倉惣五郎伝説」（惣五郎の姓は木内氏）

[http://www.icis.kansai-u.ac.jp/data/journal02-v1/08\\_nikaido.pdf](http://www.icis.kansai-u.ac.jp/data/journal02-v1/08_nikaido.pdf)

「長崎唐寺の媽祖堂と祭神について—沿海「周縁」地域における信仰の伝播—」二階堂善弘

## 地域サイト系

<http://www.yokohama-masobyu.jp/jp/> 横浜中華街-横浜媽祖廟

<http://www.geocities.jp/hakonekannon/> 「箱根観音」曹洞宗福寿院

[www.choutenguu.com](http://www.choutenguu.com) 一般社団法人「日本媽祖朝天宮」

<http://ameblo.jp/quox-umiyagusuku/entry-10508882035.html> 沖縄本島の天妃宮

<http://kumesouseikai.or.jp/shisetu/tenpigu.html> 一般社団法人 久米崇聖会

[http://blog.goo.ne.jp/gomitaro\\_1940/e/0ad35c90b2d27adeec8576569da2c869](http://blog.goo.ne.jp/gomitaro_1940/e/0ad35c90b2d27adeec8576569da2c869) 北茨城市 磯原天妃山

<http://www.geocities.jp/oldkynkyn/kaimonbashi/kaimonbashi.html> 那珂湊 開門橋 天妃山 平磯

## 基本文献（未入手）

『媽祖信仰の研究』李獻璋 泰山文物社 1979（現在古書としても入手不可）

『茨城県に媽祖信仰を尋ねて』窪 徳忠 東京大学・大正大学 1996

『再び茨城県下に媽祖信仰を尋ねて』窪 徳忠 大正大学総合佛教研究所 1997

『媽祖信仰(1)媽祖信仰の起源と伝播』窪 徳忠 勉誠出版 2002-03

『媽祖信仰(2)中国の媽祖信仰』窪 徳忠 勉誠出版 2002-05

『媽祖信仰(3)台湾の媽祖信仰』窪 徳忠 勉誠出版 / 勉誠出版 2002-06

『媽祖信仰(4)西日本の媽祖信仰』窪 徳忠 勉誠出版 / 勉誠出版 2002-07

『媽祖信仰(5)東日本の媽祖信仰』窪 徳忠 勉誠出版 / 勉誠出版 2002-08